昭和新撰 碑法帖大觀 第三輯第七冊

雲麾將軍李思訓碑

30
44

始

雲麾將軍李思訓碑

300
44

昭陵新選碑帖大觀

雲麾將軍李思訓碑

第三輯
第七卷

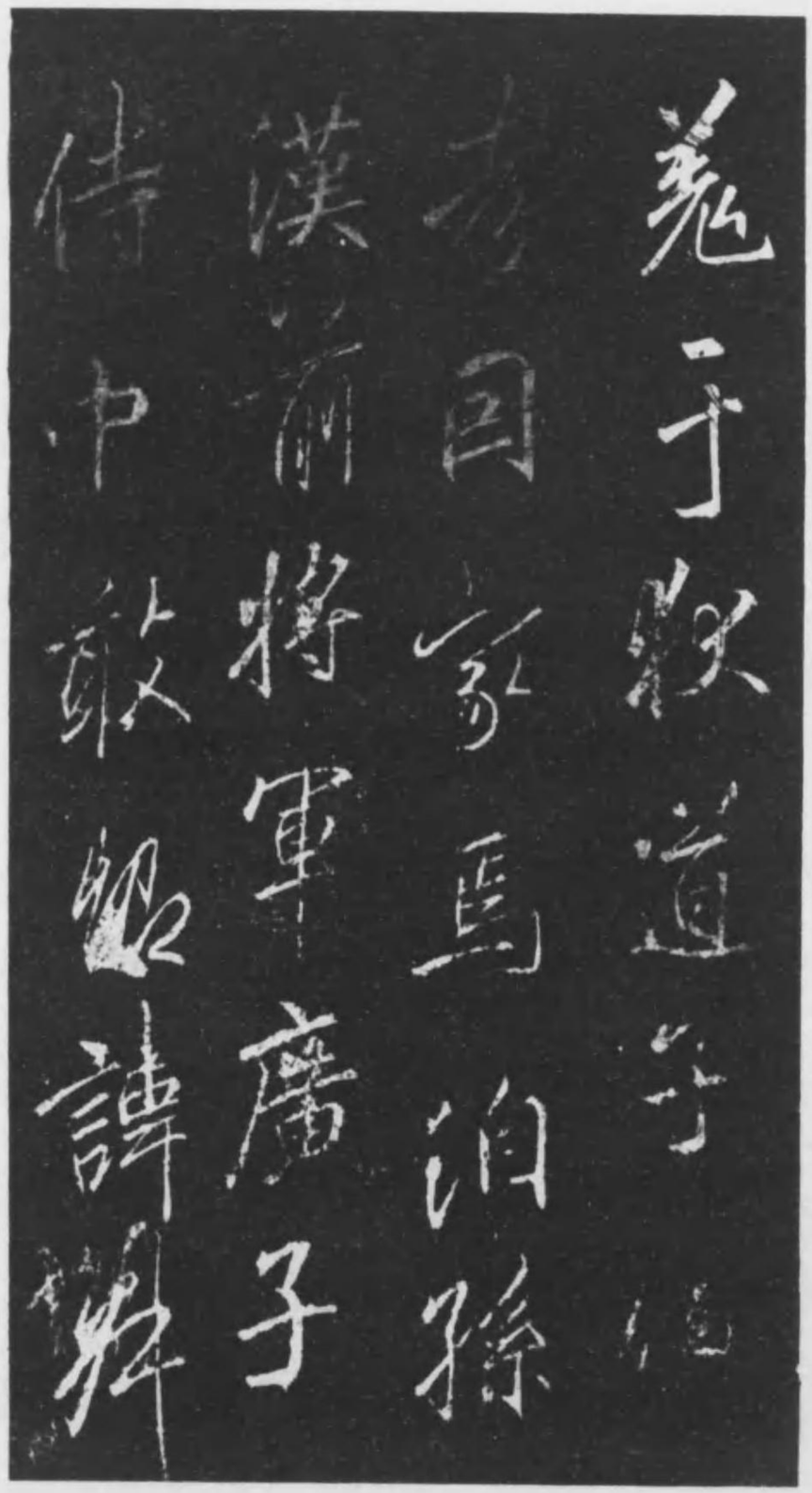
唐故雲麾將軍
右武衛大將軍
贈秦州都督
國公
謚曰昭公

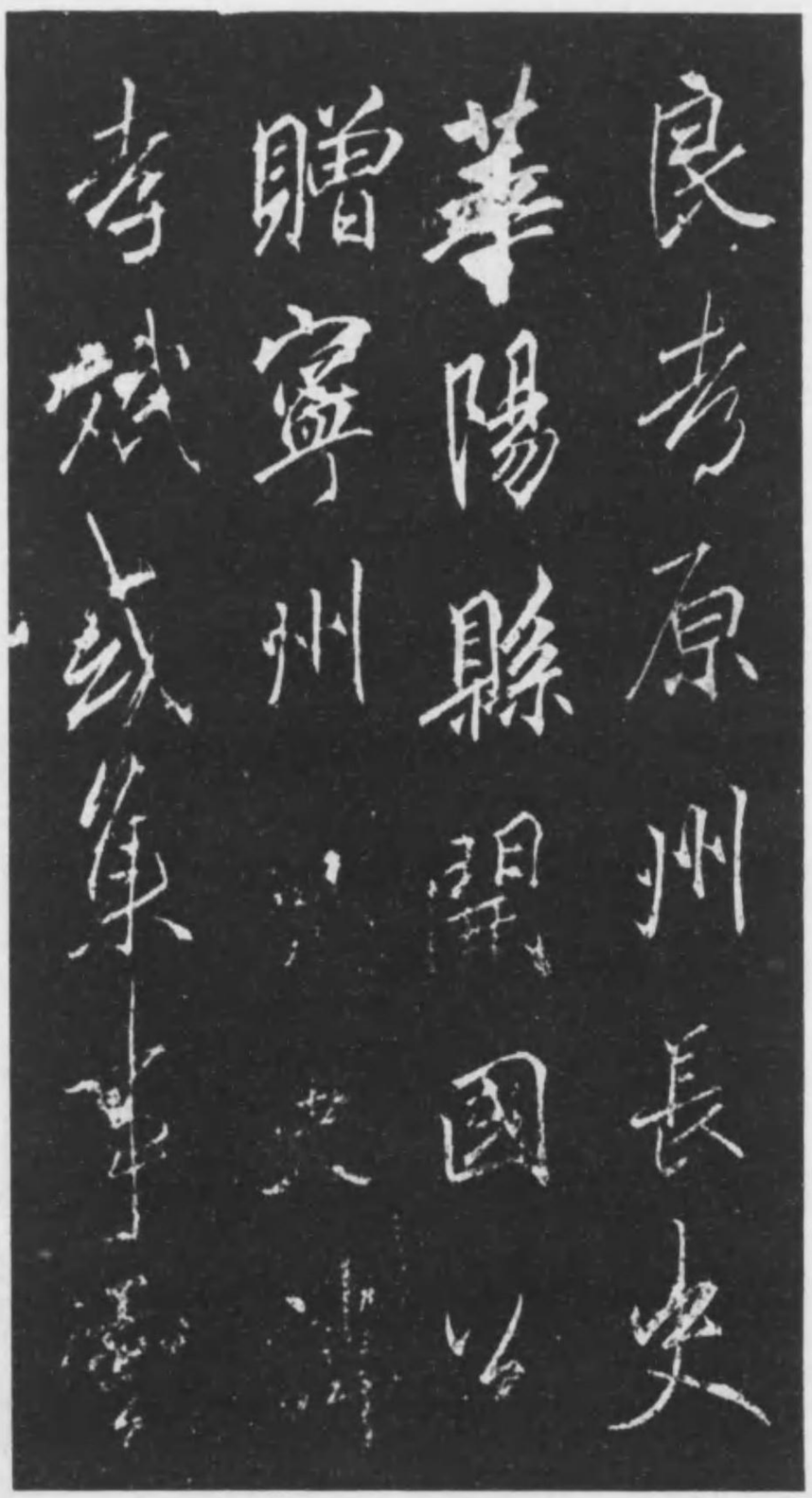
李而君神道碑
并序
龍朔元年
高以前
士秀國華偉名

昭宣神用教敏
動必前人
典彝人之儀
國以禮形
矣中

轡重養福亢宗
以以長其代遙遙
以以闕其門者其
惟我彭國以以

以諱思訓字建
藏涵秋人受於
從於秦克復其
但子仲翔討叛


義子敬
故國子
馬洎孫
漢前將軍廣子
侍中敬
卿諱


良考原
華陽縣
贈寧州
考武

雷擁蓬萊將成
飛仙然宜欲超
然遠尋好山沿
蕃纂神仙事且

來以名
教阻於
淺遊乃
博聞
書積百
所義有
道首以

之論不關於言
非俟後之譽不
介其意夫小此
可以正大化漸

翼子贊爲甘
生相秦莫可得
而聞已十有四
補宗文生業經

明行勝平明
年吏書以文翰
祖敬大夫滿歲
除常州司倉參

軍事出納之怯
職司其憂蓋小
小者于時也自
湖龍舒近圃

而出因
知所後
河而還須將
安多僊俛
免轉楊
州江都
寧以日

五行四
時十二
月情敷
祐祐音扇
所以廣
德化
所以暢
楊和氣

仁以及
鈇鉞風折
日大諾
名未活

履霜堅冰
未必驟
侯時變
而恨滿

陽家子
未舉勤
自西東
宦區区
潮漲
辟者曠
十有六
載及帝

太常寺丞斬之
未月遷
太府員
外少卿
五旬擢
宗正卿
真彤伯

加隴西郡開國
以吠傷嗣客
國諸關通
言慈邪
詞佳讒

功之語
助蓮材
亂之害亟
亂朝以
容蔭之
諛聞臣
禍之放
逐勲舊

隱廣寢儀后祭
振典業與未衛
伉伉[illegible]凶凶
作威將戰戎外

狂犘摩飛白鳥
之維然以楚英
攸詩嘗懼季良
淮南蔣山獨防

汲顯出蕭也家
富勢之目指氣
使貌掠以爲盜
費劒戟

太祖乃急於長
泰雄輕於崇文
事危尚武取亡
為義且

以左屯
衛將軍
並給俸
殷家口
為式是
演者以
雜治通
墻則文

故散騎
中兼掌
重奈之
得之須
矣散騎

平遷侍
著也所
雖以

侍象相此人
仕以
二從督昇故
一橫一文
一武文夫忠
忠嘉

子哉尋科古頌
林衛大將軍以
渝考中上又
古武[illegible]大[illegible]

且師丹廉貞則
[illegible]斯藏宋昌以
股二盆廉官威
以公忠門[illegible]也回

假開諭是究談
以實明宗差別
行其道流也默
論叅玄深視是

聖作泯於皇道
決策謀府經佐
稽叢而日月有
除霧霧成晦莫

可敕誰給後思
鳴琴蠢六十六
以背賜布絹四
百端匹米粟四

百石奚日官給
謠日昭以宜家
魏國夫人賓氏
德以宗以八年

六月廿八日合祔陪于禮也姪吏部尚書中嘯橋陵園令集資

淡學士無修國史布和邪怒以典冊厚刑器有倫貴有迫

軌物有

如父之學是切
加人之感相與
公之長子朝議
大夫院聊道等

並方名用磬業
尚居多玉性紀
深然天孔亟嘗
恐竹簡紀事未

極地華石形勝
形言麟定時秀
人才國工詩書
樂地典禮良

宰以載德濟賊
輸忠湖海雜處
清九流通赫赫
振祏宗

二恩畜福諸聿
蓐堯夏鍾家國
華氣薄安劉子
惟孝靈龜是修

桐栢烈烈棣闕
崇崇盛業何詒
佳城此中

雲麾將軍李思訓碑解說

李北海の撰並びに書である。唐の開元八年の建碑にして、頂度吾が皇紀一千三百八十年に當る。碑の高さは一丈一尺三寸六分、廣さ四尺八寸五分、三十行、毎行七十字からなつてゐる。碑額には唐故右武衛大將軍李府君碑の十二字を篆書で題してゐる。李北海は碑を書するに多く行書體を用ひ、その書せしところの碑の數は八百に及んだと云ふが、正書は唯端州石室記を見るのみである。雲麾將軍とは官名で、李北海の書いたものに、雲麾碑は二つあつて、共に姓が又同じく李氏である爲め、一寸紛れ易いが、一は李秀碑、一はこの李思訓で、全く別物である。この外李北海の碑として著名なものに、麓山寺碑、法華寺碑等があるが、研究模範としては、この李思訓碑と、麓山寺碑が最も恰好である。揚守敬は、李思訓碑は風骨高騫、李秀碑は雄渾深厚、麓山寺碑は用筆結體二碑の間にありと稱してゐる。書風が稍偏側して、幾分習氣はあるが、筆力が剛放で、規模が博大で、風骨尖利、态態佻俊と稱すべく、而もその中に王右軍の規格を藏して、實に行書模範としては、痛快な筆蹟の一つで、善く之を學ぶものは、奇逸遒勁の書を成すに難くはない。殊に李思訓碑は爽健にして博大、鋒芒がよく拔露して、實に用筆の精妙を極め、北海書中の代表作として推奬し得ると思ふ。超子昂の行書は全く北海を基礎として、王羲之をきはめたものと言ひ得る。王羲之、李北海、超子昂三者の間には一脈相通ずるものがあつて、行書研究體系として見逃すことの出來ない事實である。碑の中下部斷缺して、讀むべき字數は約二分の一位である。故に臨學する者は碑の拓本を前裁して、其の存字のみを裝貼せし爲め、國讀の釋文を施すことは不可能である。

第六行の羣書精慮衆藝之の六字、二十四行の夫人寶氏の四字未泐なるを以つて舊拓本の證査とされてゐる。

李北海略傳

李邕字は泰和、揚州江都の人なり。少にして名を知らる。李嶠、張廷珪が邕が文高く氣方直なるを薦む。召して右拾遺に拜せらる。開元中汲郡北海太守を歴たり代宗の時秘書監を贈らる。邕の文天下に名あり。時に李北海と稱す。

邕翰墨に精し。行草の名尤も著る。初め右軍の行法を學び、既にその妙を得、復乃ち舊習を擺脫し筆力一新す。李陽冰之を書中の仙手と謂ふ。裴休其碑を見て云ふ。北海の書を觀て其の風采を想見すべし。

雲麾將軍李思訓碑釋文

唐故雲麾將軍右武衛大將軍贈秦州都督彭國公謚日昭公李府君神道碑並序。

觀夫地高公族、才秀國華、德名昭宣、沖用微婉、動必簡久、言必典彝、人之儀刑、固以爲天守、中、權重養福、亢、宗以長、其代、邁德以閑其門者其惟我彭國公歟公諱思訓字建隴西狄人至信徒於秦、克復其任、子仲翔討叛羌于狄道、子伯考因家焉、洎孫漢前將軍廣子侍中敢卿諱舛良考原州長史華陽縣開國公贈寧州刺史諱孝斌或集事雲雷擁旄爲將、或承光然寡欲、超然遠尋、好山海圖、慕神仙事、且束以名教、囿於從遊、乃博覽羣書、精百氣義、直道首、公、非忠益之論、不關於言、非候度之養、不介其意、夫如此、可以近大化、漸家皐陶、畢子贊禹、甘生相秦、莫可得而聞已、十有四、補崇文生、舉經明行脩科甲、明年、吏曹以文翰、朝散大夫、滿歲除常州司倉參軍事、出納之怪、職司其憂、蓋小、小者干時也、鼎湖龍昇、歎近關而出、罔知所從、臨河而還、復將安處、僶俛轉、楊州江都宰、公日五行四時、十二月情、敷祐話言、所以廣德化、扇揚和氣、所以暢仁心、及履霜堅氷終、風折木、公歎日、天訴俟時、變名求活、所恨南陽宗子未舉、勤王、西京宰臣不聞、復□辟者、曠十有六載、及掌太常寺丞、漸也、未月遷、太府員外少卿、五旬擢、宗正、即眞形伯、加隴西郡開國公吠、傷嗣害、□國、誘關通之邪、甘言悲詞、集讒巧之譖、助逆封己、害正亂、朝、公密要之諛、開臣禍之放、逐動舊、慰鳥寇讎、后族握兵、黨與屯衛、仡仡賈勇、凶凶作威、持戟或外廷擣摩、飛白鳥之難、然以楚兵致討、嘗懼季良、淮南存凶、獨防汲黯、出舊也、家富勢足、目指氣使、驅掠以爲浮費、劒戟以爲盜奪、公乃急於長秦雄、緩於崇文、事危尙武、取申忠義、且屈才能、以左屯衛將軍徵、家口、並給傳、議者以爲式、是嶠則文雅洽通、故散騎平遷、侍中兼掌、昔也所重、今之所難、公得之復矣、散騎侍相此之□仕、以心稽昇、故一從一橫、一文一武、丈夫也、君子哉、尋科右羽林衛大將軍、以渝考中上、又更右武衛大將軍、且師丹廉貞、則拜斯職、宋昌心腹、亦登厥官、或以公包門也、因假開喩、是究談、以實明、宗、差別行、其道流也、默論參玄、深視見聖、作泯於皇道、決策謀府經德智囊、而日月有、除、霧露成、疾、莫可救、誰能度思、嗚呼、春六十六、以督贈布絹四百端匹、米粟四百石、葬日官給、謚日昭公、宜家魏國夫人寶氏、德心守、以八年六月廿八日合祔、陪于橋陵園、禮也、姪吏部尙書中書令集賢院學士兼修國史布和、弘恕以歸厚、刑器、有典、軌物有、倫、嘗追如父之思、是切、加人之感相與、公之長子朝議大夫院昭道等、並才名用譽、業尙居多、至性純深、終天孔亟、書恐竹簡紀事、未、揔

300
44

聲華石形　形言鱗定時秀人才國土詩書樂地典禮良弓率心載德濟義輪忠湖海雅度清九通赫赫復子振振祓
宗三思齋禍諸韋荐兇憂經家國華氣薄安劉子惟孝靈龜是從桐栢烈烈碑闕崇崇盛業何許佳城此中

版權所有

昭和十三年三月三十日印刷
昭和十三年三月廿一日發行

昭和新撰 碑法帖大觀 第三輯第七卷
雲麾將軍李思訓碑

編輯兼發行人　田中和市
印刷所　玉石社　玉木印刷所
印刷人　玉木源郎
發行所　事樂書道會

300
44

終